

看護とは何か

栗原 静香

看護師になろうと思ったきっかけ

高校生の時から看護師になろうと決めていた。理由はたくさんあったと思うが、担任だった船橋先生の一言が大きかったと思う。あの頃は自分に自信がなく、夢も漠然としていて、「私なんか」と自己肯定感の低い自分がいたが、「青木は看護師に向いていると思うよ」と言って応援してくれた。看護師に向いているなんて、なんの根拠もない。けれど、真っ直ぐ私を見て言ってくれる人がものすごく新鮮に映った。「それなら本気で看護師を目指してみようかな」と思うようになった。

祖母の認知症の進行

19歳、准看護学生1年生の時、祖母の認知症が急激に進んだ。物忘れも多く、昼夜逆転の日々。朝起きると炊飯器のご飯は空っぽになっていることもよくあった。日々変わっていく祖母の姿に心がついていけないまま、その年の冬祖母は他界した。認知症への知識があれば、祖母にもっと寄り添うことが出来たのかもしれない。そんな後悔を胸に抱きながら看護学生のスタートを切った。

想像を絶するハードな現実

最初の病院に約11年勤めた。看護補助者からのスタートで看護師を目指してただがむしゃらに走り続けた11年だったと思う。想像を絶する日々に嫌になることもあったが、患者さんから多くの事を教えてもらい、また励まされた。私のことを孫のように慕ってくれた末期がんの患者さんがいた。延命治療をせずに最期を迎えようとするときに私をお孫さんの名前で呼んでくれた。看護が患者さんにとっていろいろな意味を持っていることを

学ばせてもらった。そのおかげで今も看護師を続けられている。

仕事に行けなくなった日

新人教育の仕事を任せてもらうようになってから2年。いつも仕事のことばかり考えるようになっていた。今まではON、OFFの切り替えができていたが、休みの時も上司から仕事の連絡が鳴っている。仕事とプライベートの切り替えがしだいに出来なくなっていきストレスが溜まるようになってきた頃、体に症状が現れるようになっていた。夜眠れない。動悸がする。仕事に行こうとすると決まって吐き気が襲ってくるようになっていた。上司、同期に相談しても対応してもらえなかった。やっとの思いで師長に退職の話を相談した日、「青木さんなら大丈夫よ」と言われてとうとう仕事に行けなくなった。忘れもしない2月。そこから1ヶ月休職することになった。

自分自身に嘘をつかないことにした

「我慢すればいい」と自分の感情に蓋をし続けた結果、仕事に行けなくなった。「どうしてこんな簡単な事ができなかったのだろう」と考えた結果、「波風立てたくない、嫌われたくない」という心理が大きく働いたのだと思った。

休職している間にいろいろ考えた。「仕事を辞めて新しい環境に身を置く」とシンプルな決断をし、「我慢すればいい」から、「最後だから本音で話す」にした。仕事復帰後、上司、同期の同僚に自分の気持ちをはっきり伝えることができた。「万人に好かれようとは思わない」と思うようになってからは、日々上手くいくようになった。自分自身に嘘をつ

かずに口に出して伝えることは、自分を大切に
する事に繋がると思った。そう考えながら
転職の準備をした。

夢は小児科勤務か助産師だけだ

以前、私が子どもの頃通っていた小児科病
院の看護師さんが入院してきた。Aさんだ。
私は、はじめ名前を聞いてもピンと来なかつ
たが、「静香ちゃん？私、〇〇小児科にいた
看護師だよ。大きくなったね。綾香ちゃん（私
の双子の姉）も元気？看護師さんになったん
だね。」と笑顔で話しかけてくれた。私は今
でもよく覚えている。いつも笑顔で、注射の
上手な看護師さんだった。そしていつも優し
い。私もいつかこんな人になりたいと思った。

私自身、子どもが大好きで、小児科か産婦
人科に勤務するのが夢だった。しかし勤め先
には、小児科も産婦人科もない。新しい環境
に飛び込む勇気もなかった。だから憧れと言
い訳をつけて逃げていた。

人生は一度しかないから

しかしそんな私にも転機がやって来て退職
する方向が決まっていた。私の夢の小児科勤
務ではもちろんなく、病院務めに疲れて、と
りあえず施設に務めるという不甲斐ない理由
だった。一度違う環境に身を起きたかったし、
生活するためだと割り切った。

そんな矢先、患者のAさんの容態が急変し、
最期を看取ることになった。先輩看護師と一
緒にエンゼルケア（死後のケア）を施した。先
輩はAさんが私がお世話になった人だと知っ
ていた。「青木さんが、お世話になったAさ
んの最期の時間とケアができて本当によかつ
たね。Aさんも喜んでるよ。また会えたの
もきつとなにかの縁だね」涙がこぼれるのを
必死で我慢してエンゼルケアをした。人生は
一度きり。やっぱり自分の夢を夢で終わらせ
てはダメだ。そうAさんも私に言ってくれて
いる様な気がした。決して簡単な道ではない
けれど、いつかは夢を叶えたいと思う。

新しい環境でみつけた仲間

新しい生活が4月からスタートした。自分
が選んだ道だけれど前の職場より環境はもつ
と悪い。残業手当はほぼ出ない。昇給は年に
500円。ワンマンな上司。問題はもっとある
が、それでも前向きでいられるのは、一緒に
頑張ってくれる「仲間」ができたからだ。私
の大きな励みになっている。前の職場にはい
なかった存在だ。

今の職場に務めて4ヶ月たった頃、若い介護
のスタッフに相談された事がきっかけで労働
組合を立ち上げる方向が見えてきた。「基本
給が13万円。月に7.8回の夜勤は本当に辛い。
子どもと妻に、満足な生活させてやれない。
だから仕事辞めたい。工場勤務にしようかな」
と言う。介護職が本当に好きな人だ。言われ
た時、胸が締め付けられる程辛かった。好き
な仕事、やりがいでだけではやって行けない仕
事ってなんなんだろう。彼は仕事を辞めたらき
っともう、介護職をしないだろう。だって好
きな仕事、やりがいでだけでは食べていけない
からだ。

ふと、私が転職する時、心配して船橋先生
が言ってくれた言葉を思い出す。「君は労働
組合に入った方がいい。必要なら紹介する」
私は、すぐ行動に移した。先生に連絡を取り、
会いに行き、相談した。先生もいろいろ探し
てくれて、医労連というところに相談のアポ
をとってくれた。

労働組合も看護の仕事も道はきつと険しい
と思う。けれどもう後悔しないで仲間といっ
しょに前に進むと決めた。

